

私たちの暮らしをつなぐ
木の力

人の暮らしと、究極の 自然素材である木との関わり

西川 栄明

Written by
Takaaki Nishikawa

ノンフィクションライター、
編集者

「いい木の香りがしますね」

「なんか、ぷんとしてきます」

わが家を初めて訪ねてくる人が、玄関を開けるなりこのような言葉を発することがたびたびある。

パイン(マツの仲間)材で建てたログハウスに住み始めて十数年になる。長年木に囲まれて暮らしていると、鼻の感覚がマヒしてしまっただのか、今では木の香りを意識することもない。床も壁も天井も、節が目立つ無垢のパイン材がむき出し状態。そんな中で、食事をして、仕事をし、本を読み、肅々と日々の生活を送る。

取材などで家を長期間あけることが多いのだが、自宅に帰ってきて安らぎのようなものを感じるのは、木に囲まれた空間で暮らせることに知らず知らずのうちに体が反応しているからだろう。ぐっすり眠れるのは、枕のせい

だけではなさそうだ。

「レトルトカレーを木のスプーンで食べると格段においしくなる」

自作の木のスプーンを食事の際に使っている友人がいる。クルミの木を彫刻刀で削り出した。見た目は少しバランスがとれていない気もするが、自

分で仕上げた木のスプーンはかわいくなっくわらしい。口あたりも使っているうちになじんできたという。

以前、私は木のカトラリーに関する本を上梓



木のスプーンでヨーグルトを食べさせてもらう男子

したことがあり、執筆する前に何十種類もの木製スプーンやフォークを集め、すべて使い心地を試してみた。今でも手元にどっさりあるので、シチューやカレーを食す際に「今日はどれを使おうかな」と、その日の気分を選んでみる。ノミ跡が残っていて少しくちびるに引かかるもの、きれいに機械加工して仕上げた口の中にペロッと滑り込むもの……。どれも、金属製やプラスチック製にはない、木特有のやわらかさと堅さを兼ね備えた質感が伝わってくる。

「漆のお椀は箱の中に入れて大事に押入れの奥にしまっておくのではなく、どんどん日常生活で使ってくださいよ。漆器は使わないとね。扱っても簡単なんですから」

ある木工芸家を取材した折に聞いた言葉だ。どうも漆器の扱いはやっかいだなと感じてい



山中塗の器の木地をろくろで挽く木地師

森や木と人との長くて深い関係

森と木と人。この三者の関係は、太古の昔からかなり緊密なものだった。人が生きていく上で、森や木は必要欠くべからざるもの。経済活動や文明の発展過程において、人は森や木から計り知れない恩恵を受けてきた。

豊かな森が育まれることにより清流が生み出され、水資源の確保につながっていく。洪水を防ぐ調整機能も担ってくれる。さらには、清流が運ぶ森の栄養分が流れ出す海にまで好影響を及ぼす。炭素の排出吸収貯蔵という面からも森の存在は大きい。

森の中で木の実を拾い、キノコや果実を採り、それらを貴重な食料としてきた。さらには、木を切り出して日常生活で使う器具や農耕・漁労の際に用いる使い勝手のよい道具などのモノを作り、梁や柱を組んで住まいを建てた。木の繊維から衣類も編んだ。薪や炭は燃料となった。衣食住すべての分野において木を活用してきた。

例えば、青森県の三内丸山遺跡から出土した大きなクリの柱は、推定で約5000年前に作られたものだ。縄文時代から漆器が作られていたことも確認されている。紀元前3100年ごろには、古代エジプトで木製椅子が作られていたことがわかっている。ちなみに、現存する最古の木製椅子は、カイロ・エジプト博物館に所蔵されている第4王朝のヘテプヘ

レス王妃(紀元前2600年ごろ)の椅子だ。

先日、ロンドン大学構内にあるピートリー博物館を見学した。ナイル川流域周辺から考古学者のフリンダーズ・ピートリー(1853~1942年)が発掘した様々な品が収蔵されている。木のおもちゃ、小箱、スプーンなど木製品が多いのに驚いた。あまり大木が生えていないイメージのあるナイル川流域でも、木の文化が醸成されていることに気付かされた。最も驚いたのが、木の塊から削り出した3本脚スツール。1本の脚は欠けていたが、何千年も昔の職人が木を削り出した生々しいあとを間近に見た時には、今も昔も変わらぬ作り手の執念のようなものが伝わってきた。

適材適所という人間の眼力と知恵

全国各地の森にはいろいろな種類の木が生えている。地球全体を見渡せば、何千種類もの樹種に及ぶだろう。

人間の眼力と知恵のすごさを感じるのは、あまたある木の中から一つひとつの特性を見極めて、その用途にふさわしい木を選んできたことである。

元々は、身近なところで取れる木で日常の道具を作っていたと思われる。今のようにならぬ通システムが確立していたわけではない。木にも向き不向きがあって、試行錯誤しながら「この木は水に浸けていても長持ちする」な

る人が多い。しかし、実際には無茶な扱いをしなければ実に使い勝手のいい器である。私は普段から山中塗のお椀を使っている。先ほどの友人のカレーの話と同じように、みそ汁の味が漆器の口あたりによって、おいしさが増すような気がしている。

こんなふうに、木の道具を使いながら木に囲まれた暮らしをしていると、何となく日々の生活に潤いが生まれてくる。科学的にどうのこうのというのではない。感覚的なものではあるが、たしかに木が何らかの起因となってもたらされるのだろう。

どと経験を積むことによつて学んでいったの
だろう。そうした中から、「クリは腐りにくい
から家の土台にいいぞ」と、代々伝えられて
きたのだ。

堅いかやわらかいか、重いか軽いか、粘りが
あるか、曲げやすいか、割りやすいか、木目が
濃いか目立たないか、音の響きがいいか、水に
強いかな。それぞれの木の性質を見抜いて、ど
このどの部分にどの木を用いればいいかを
得ていったのだ。それが、大工や職人などの
作り手によつて現代まで建築技法や木工技術
とともに受け継がれている。

例えば、ホオという木。香りのいい大きな
葉っぱに味噌を包んで焼く朴葉味噌で知られ
ているが、ある特定の用途として昔から使わ
れてきた。それは日本刀の鞘。「ホオは刀の刃
にやさしい。刀を鞘に収める時に刃が当たっ
ても問題ない」と鞘師が話していた。比較的
軽くて加工もしやすいという点も、鞘に向い
ているのだろう。

やわらかくて加工しやすいという材には、
カツラがあげられる。節も少ない。ということ
から仏像を彫るのによく用いられた。このカ
ツラには身近なところで、特化して使われて
いた用途がある。住所印などの持ち手の材は
主にカツラだった。「カツラは手に持った感触
がいい。手になじむ。いっぱい生えているマツ
やスギをなぜ使わないかって？ 針葉樹はさ
さくれ立った感じがするだろ」と、印材屋の親
父が教えてくれた。

大手楽器メーカーが製造する最
高級グランドピアノには、約50種
類もの木材が使われている。その
中でも堅くて粘り強いイタヤカエ
デは、鍵盤を叩いて弦に強い力を
伝える際に重要な役目を果たす。
ピアノ設計者は事細かに、どの部
分に何の木を用いるか指定する。

このように、人が木と深い関わ
りを持ったことによつて、木の文
化というものが何百年、何千年に
わたつて育まれてきた。しかし、こ
の数十年の間に石油化学製品の大
量生産などによつて、木の文化の衰退する姿
が見受けられることは残念なことだ。木を素
材としてのづくりをする担い手の減少も気
になるところである。

ただしその一方で、木の魅力を認識して、木
の道具や建築物を見直す機運があることも事
実だ。特に、若い世代に木製家具や木の器の愛
好者が増えている。作り手においても、20代後
半から30代後半にかけての木工作家が増加傾
向にある。

木を素材にした道具を 日々使う生活

「なるべくテーブルの上には物を置かないよ
うにしています。きれいな木肌を見たいです
から。仕事から疲れて帰ってきてても、テー
ブル



木工作家・村上富朗さん作のロッキングチェア。
材はウォルナット

を見るといとおしくてなごんでしまう」

リビングルームに置かれたナラ材のテー
ブル。天板には虎斑とらふが入っている。この家の主は
新築の家に置くテーブルを探していたところ、
ある家具店でナラの天板と出合った。力感が
あふれながらも細やかさも備える木目に惚れ
込んだという。

「自分の体形にあった木のいい椅子がほし
かった」と、十数万円のロッキングチェアを
購入したという都心のマンションに住む女性
は、木工作家に特注して作ってもらった。マ
ンションの一室にこの椅子があるだけで、気
分が落ち着くそうだ。

家具だけではない。木製のおしゃれなデザ
インの小物を普段づかに用いている人も目
立つ。最近はや当ブームで、木製の弁当箱を持
つて会社へ通勤する人もいる。「秋田杉の弁当

箱です。通気性がいいのか、ご飯がおいしく感じますね。休憩室のランチタイムでは注目のです」。

弁当といえば箸が必需品だ。マイ箸ブームで、お気に入りの箸を持ち歩いている人も時々見かける。そこで気になるのが割り箸。最近、外食チェーン店などが、自然環境にやさしいしコスト安になるということで、割り箸ではなく樹脂製箸を使い出した。これには違和感がある。樹脂製箸は石油から作られ、洗浄する



秋田杉の弁当箱

際には洗剤を使用する。割り箸の産地である奈良県吉野地方で製造される割り箸の材料は、製材で切り落とされた端材ともいえる吉野杉の背板である。最近では各地で間伐材の箸も作られている。木を無駄にしないという観点からも国産割り箸の利用が望まれる。そばをすするのに樹脂製箸は似合わない。

ちなみに、現在、国内で消費される割り箸の多くは価格の安い輸入品だ。その主な材は、シラカバ、アスペン（ポプラの仲間）、竹。いずれも成長が早く再生産期間が短い。資源の枯渇が危惧される石油を原料とする樹脂製品を使うより、理にかなっているという見方もできる。

資源の循環という点からいえば、古民家再生や老朽化した建物を解体する際に出る木材のリサイクルという点も見逃せない。「古い牛舎を取り壊した時に、梁や柱や壁板を全部譲り受けました。昔このあたりに生えていたミズナラやタモなど。それに鉋をかけなおしてみると、きれいな木肌が浮かび上がってきた。その材を使って、今、家を建てているところですよ」と話す知人は、北海道の原野で自宅のセルフリルドに奮闘中。木は何百年と生きてきた後に、家の構造物や家具として第二の「木生」を送ることができる。その間、炭素は排出されず木の中に貯蔵されたままだ。

法隆寺の解体修理を手掛けた宮大工棟梁の

西岡第一さんは、「木の命には二つありますのや。一つは今話した木の命としての樹齢ですな。もう一つは木が用材として生かされてからの耐用年数ですわな」と著書『木のいのち木のこころ(天)』に記している。法隆寺を例にとると、7世紀後半に建てられ、20世紀半ばに解体修理されたが今も現存する。恐らく樹齢千年以上のヒノキが使われているであろうから小さな芽を出してから二千数百年も生き続けていることになる。

木は恐るべき持続可能でエコロジカルなものなのだ。木を使うことによって生活に潤いをもたらし、さまざまな特質を持つ究極の自然素材であるという点を、今一度、再認識しておきたい。

西川 栄明 (にしかわ・たかあき)

ノンフィクションライター、編集者。1955年神戸市生まれ。現在は森林から木工芸や家具に至るまでの木に関するテーマを主に執筆や編集に携わる。主な著書に、『日本の森と木の職人』(ダイヤモンド社)、『手づくりする木のツール』(手づくりする木のカトラリー)『木の匠たち 信州の木匠家25人の工房から』(いずれも、誠文堂新光社)、『手づくりの木の道具 木のおもちゃ』(岩波書店)、『北の木仕事』(北の木と語る) (北海道新聞社) など。